=市史編さん便り=　【第 27 号】 令和 3 年 8 月 24 日(火) 発行.
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊土佐清水市教育委員会生涯学習課・市史編さん室

―大正 9 年 8 月 15 日「大豪雨災害」について―

生涯学習課・市史編さん室　田村　公利

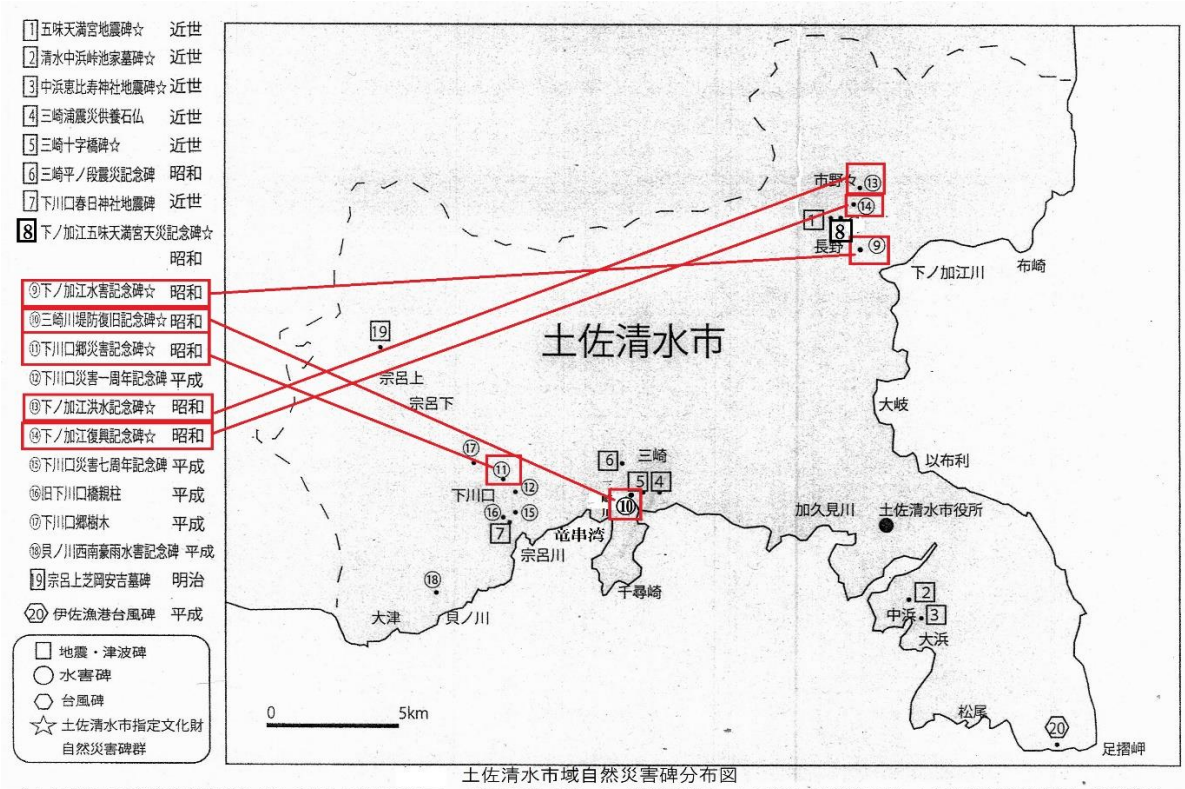
8 月は炎天が続き、脱水に注意しなければならないかと思いきや、盆前から雨天がほとんどで、梅雨が二度やって来たようにさえ感じた。最近、天気予報で「線状降水帯」という言葉をよく聞く。次々と発生する発達した積乱雲が列をなし組織化して積乱雲群となり、ほぼ同じ場所に停滞し続けて豪雨をもたらす現象である。この豪雨の傾向は、既に 20 年前からも局地的に見られていた。平成 13 年(2001)9 月に発生した高知県西南豪雨災害もほぼ同じ気象状況であったと私は思う。

この夏も静岡県・九州全域と四国の一部・広島県・長野県など日本列島の広い範囲でこの線状降水帯が発生し、豪雨に起因する河川の氾濫や土砂災害が多く発生した。

＊＊＊　　＊＊＊　　＊＊＊　　＊＊＊

今から 101 年前の大正 9 年(1920)8 月 15 日、高知県全域を未曾有の大豪雨災害が襲った。この豪雨によって、土佐清水市域も「下ノ加江川」「三崎川」「宗呂川」などの大きな川が堤防決壊し、河口部の川に面した集落に甚大な被害をもたらした。

この豪雨災害に関する石碑が、（1）下ノ加江(市野瀬・長野)に３基、（2）三崎浦に１基、下川口郷に１基の計５基所在している（次の分布図参照)。



土佐清水市域自然災害碑分布図

『土佐清水市域自然災害碑調査・郷土の先人たちからのメッセージ』土佐清水ジオパーク推進協議会、土佐清水市危機管理課、土佐清水市教育委員会、2020年を基に田村公利が作図。

（１）下ノ加江復旧記念碑（市野瀬）、下ノ加江洪水記念碑（市野瀬）
　　下ノ加江洪水記念碑（長野）
（２）三崎堤防復旧記念碑（三崎浦）
（３）下川口郷災害記念碑（下川口郷）

「土陽新聞」(大正９年８月 21 日付け)から・・・

市史編さん業務の資料収集に「オーテピア高知図書館」で調べる機会があったときに、「大正９年８月 15 日の豪雨災害」の記事を検索する機会があった。大正９年８月 21 日付け「土陽新聞」(「高知新聞」の前身) にこの豪雨災害のことが掲載されていた。見出しに「今回の暴風雨が生んだ本懸未曾有の大惨禍　惨澹たる幡多郡の被害」とあり、松田川が氾濫して宿毛付近を一呑みとしたこと、幡多郡内の死者が 100 名に達したことなどが記されていた。

＊＊＊　　＊＊＊　　＊＊＊　　＊＊＊

その他の小見出しをざっと紹介する。「奔流の響きに和する阿鼻叫喚の物凄さ　屋根の上で救助を叫びながら家と共に流されて行く罹災民」「暴風雨中の水攻火攻　火を免れた親子の溺死」「行方不明 31 名　死体 16 個發見　着のみ着のまゝ避難民　1200 名を寺院に収容」「農作物の収穫皆無　中村町の浸水家屋五百」「幡西八ヶ村惨死者 80 名」等々その惨状を伝えている。

幡西八か村の内分けは、小筑紫村 20 名死者、奥内村 20 名死者、八束村 15 名死者、東山村 12 名死者、和田村 5 名死者、佐賀村 4 名死者、平田村 4 名死者であった。死因は土砂崩れによる死亡、溺死がそのほとんどを占めた。

被害は、幡多郡のみならず、土佐山村・黒岩村、赤野村、高知市鏡川周辺にも広がった。

このように伝説の域を脱しない「大正９年８月 15 日大豪雨災害」は、土佐清水市域ばかりでだけはなく、幡多郡を中心に高知県全域に大きな爪痕を残し、尊い人命を奪っていったのである。

高知県西南豪雨災害(2001 年９月)について

大正９年（1920）８月 15 日から 81 年後の平成 13 年(2001)９月に「高知県西南豪雨災害」が発生した。この豪雨災害も幡多郡全体を襲い、大正９年以来の水害をもたらした。特に宗呂川沿いの中流から下川口浦地区にかけての一帯では堤防が決壊するなど、家屋は浸水し、甚大な被害が生じた。地域の古老の中には、大正９年の豪雨災害のことを話していた人がいたことを思い出す。

私は、当時、宗呂川沿いに立地していた下川口中学校に勤務していた。早朝、当時の岩井正道校長より、洪水で臨休にするので、生徒に連絡せよとの命を受けたことを昨日のことのように思い出す。当然のことながら生徒の家に電話が通じるはずもなかった。携帯電話のない時代である。水に浮かぶような光景に唖然とした記憶が残る。

↑【写真1】平成 13 年(2001)9 月に発生。「高知県西南豪雨災害」(撮影:田村公利)
宗呂川の堤防から水があふれ、校舎と校庭、体育館を呑み込んだ。堤防決壊の原因は、沢抜け現象により、流木が多く流れ、それが川を堰き止めたことに起因するとみられる。粘土状のドロが廊下や教室の床に厚く堆積していた。

←【写真2】下川口 3 年教室に堆積する粘性土砂。
田村が当時 3 年学級担任をしていた。黒板の上段まで白い泥水の跡がくっきりと残り、1m60cmくらいの水位があったことが理解できる。(撮影・田村公利)

↑【写真3】宗呂川で教材・教具を洗う教職員。（撮影・田村公利）
右前で川に浸かっているのが田村、中央が当時三崎中学校に勤務しており、作業の手伝いに来てくださった文野貴之先生（後の下川口小学校長）。

【編集後記】

気が付けばいつの間にか、秋。ここ数年以来続く、豪雨災害に振り回され、雨、雨、雨の夏だった。蒸し暑い日が続く毎日でしたが、編集委員各位におかれましては、市史編さんに関わる執筆活動本当にお疲れさまです。

本便り第 25 号にて周知させていただいたとおり、第 2 回市史編集委員会（監修と委託業者、市史編集委員、市史編さん室職員で構成）を 9 月後半に計画させていただいております。そのとき添付しました「日程調整票」を 8 月 30 日までに必着でご投函ください。なおＦＡＸでご提出いただいても可です（ＦＡＸ0880 - 87 - 9132）。

平成 13 年（2001）の西南豪雨のあと、清水警察署の警察官の方々がチームを作り、私が顧問をしていた男子ソフトボール部と練習試合をしてくださったり、全国からたくさんの文具をお寄せいただいたり、その感謝の思いでいっぱいである。

大正末期、豪雨災害とスペインインフルエンザの大流行があった。疫病の蔓延と天候不順、ちょうど今の状況に似ているように思うのは私だけではないだろう。コロナの終息と天候の安定を祈るばかりである。